

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という、「私の思い」が含まれています。重要なのは、それが「私の思い」でしかないことです。

思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分かりません。「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべきだ」になるとき、利他の心は、容易に相手を支配することにつながってしまいます。

つまり、利他の大原則は、「自分の行為の結果はコントロールできない」ということなのではないかと思っています。やってみて、相手が実際にどう思うかは分からない。分からないけど、それでもやってみる。①この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。

「自分の行為の結果はコントロールできない」とは、別の言い方をすれば、「見返りは期待できない」ということです。「自分がこれをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」という押しつけが始まる時、人は利他を自己犠牲ととらえており、その見返りを相手に求めていることになります。

私たちのなかにもつい芽生えてしまいがちな、②見返りを求める心。^{*1}ハリファックスは、④警鐘を鳴らします。「自分自身を、他者を助け問題を解決する救済者と見なすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己陶醉へと傾きかねません（『Compassion』）。

^{*2}アタリの言う合理的利他主義や、「情けは人のためならず」の発想は、他人に利することがめぐりめぐって自分にかえってくると考える点で、他者の支配につながる危険をはらんでいます。ポイントはおそらく、「めぐりめぐって」というところでしょう。めぐりめぐっていく⑥カテイで、私の「思い」が「予測できなさ」に③ギョウシユウされるならば、むしろそれは他者を支配しないための想像力を用意してくれているようにも思います。

どうなるか分からないけれど、それでもやってみる。^{*3}ブレイディみかこは、コロナ禍の英国ブライトンで彼女が目にした④コウケイについて語っています（ブレイディみかこ×栗原康「コロナ禍と『クソ』どうでもいい仕事」について、「文藝界」二〇二〇年一〇月号）。

ブレイディによれば、町が^{*4}ロックダウンしているさなか、一人暮らしのお年寄りや自主⑥カクリに入った人に食料品を届けるネットワークをつくるために、自分の連絡先を書いた手づくりのチラシを自宅の壁に貼ったり、隣人のポストに入れて回ったりしていた人がいたそうです。普通ならば「個人情報が悪用されるのではないか」などと警戒するところですが、そうではなく、とりあえずできることをやろうと動き出した人がいた。

ブレイディは、これは一種の^{*5}アナキズムだと言います。アナキズムという①一切合切破壊するというイメージがありますが、政府などの上からのコントロールが働いていない状況下で、相互扶助のために立ち上がるという側面もある。コロナ禍において、とりあえず自分にできることをしようと立ち上がった人は、日本においても多かったように思います。

^{*6}レベッカ・ソルニットの「災害^{*7}ユートピア」という言葉があります。これは、地震や洪水など危機に見舞われた状況のなかで、人々が利己的になるどころか、むしろ見知らぬ人のために行動するユートピア的な状況を指した言葉です。

③このようなことが起こるひとつのポイントは、非常時の混乱した状況のなかで、平常時のシステムが機能不全になり、①状況が刻々と変化するなかで、自分の行為の結果が予測できなくなることにあるのではないかと思います。どうなるか分からないけど、それでもやってみる。混乱のなかこそ純粋な利他が生まれるようにみえる背景には、この「読めなさ」があります。

他方で平常時は、こうした災害時に比べると、行為の結果が予測しやすいものになります。少なくとも、平時の私たちは、自分の行為の結果は予測できるという前提で生きています。

②、だからこそ「こうだろう」が「こうであるはずだ」に変わりやすい。実際には相手は別のことを思っているかもしれないし、いまは相手のためになっても、一〇年後、二〇年後にはそうではないかもしれない。

にもかかわらず、どうしても私たちは「予測できる」という前提で相手と関わってしまいがちです。「思い」が「支配」になりやすいのです。利他的な行動をとるときには、とくにそのことに気をつける必要があります。

そのためにできることは、相手の言葉や反応に対して、③真摯に耳を傾け、「聞く」こと以外にないでしょう。知ったつもりにならないこと。自分との違いを意識すること。利他とは、私たちが思うよりも、もつとずつと受け身なことなのかもしれません。

^{*8}さきほど、信頼は、相手が想定外の行動をとるかもしれないという前提に立っている、と指摘しました。「聞く」とは、この想定できていなかった相手の行動が秘めている、積極的な可能性を引き出すことでもあります。「思っていたのと違った」ではなく「そんなやり方もあるのか」と、むしろこちらの評価軸がずれるような経験。

他者の潜在的な可能性に耳を傾けることである、という意味で、利他の本質は他者をケアすることなのではないか、と私は考えています。ただし、この場合のケアとは、必ずしも「介助」や「介護」のような特殊な行為である必要はありません。むしろ「こちらには見えていない部分がこの

人にはあるんだ」という距離と敬意を持って他者を気づかうこと、という意味でのケアです。耳を傾け、そして拾うことです。

ケアが他者への気づかいであるかぎり、そこには必ず、意外性があります。自分の計画どおりに進む利他は押しつけに傾きがちですが、ケアとしての利他は、小ささまざまなよき計画外の出来事へと開かれている。この意味で、よき利他には、必ずこの「他者の発見」があります。

さらに考えを進めてみるならば、よき利他には必ず「自分が変わること」が含まれている、ということになるでしょう。相手と関わる前と関わった後で自分がまったく変わっていないければ、その利他は一方的である可能性が高い。「他者の発見」は「自分の変化」の裏返しにほかなりません。

(伊藤亜紗『利他』とは何か』より)

(注) *1ハリファックス……アメリカの人類学者、ぜんどう禅僧。

*2アタリ……フランスの経済学者。

*3ブレイデイみかこ……日本の作家、コラムニスト。

*4ロックダウン……危険や差し迫った脅威のために、特定の地域の出入りや地域内の移動ができない緊急の状況。

*5アナキズム……一切の権力を否定し、個人とその集団の自由を拘束しない社会を実現しようと主張する政治思想。

*6レベッカ・ソルニット……アメリカの作家、歴史家。

*7ユートピア……理想郷。

*8さきほど……本文よりも前の部分で筆者が指摘したことを指している。

問一 傍線部①「この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。」とあるが、「不確実性」とはどのようなことか。簡潔に答えなさい。

問二 傍線部②「見返りを求める心。」とあるが、ここで使われている表現技法として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 比喩 イ 反復 ウ 倒置 エ 体言止め オ 対句

問四 傍線部③「このようなこと」が指す内容を三十五字以内で答えなさい。

問五 空欄Ⅰ・Ⅱに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア だから イ でも ウ なぜなら エ ところで オ さらに

問六 筆者の理想とする「利他」とはどういうことか。本文全体の内容を踏まえて、五十字以上六十字以内で答えなさい。

問七 本文に関する説明として**適当でないもの**を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 冒頭部において「私の思い」と傍点を付すことで、利他的な行動が陥りやすい問題点について指摘している。
 イ ささまざまな人物の言葉を引用することによって、利他的な行動に関する筆者の意見に説得力を持たせている。
 ウ 災害時と平時の対比を通して、結果の予測が難しい災害時に利己的な行動に走りやすいことを問題視している。
 エ 文末に「と思います。」「かもしれません。」などの言葉を用いることで、自らの意見を慎重な姿勢で提示している。
 オ 終末部において「ケア」という言葉の本文中における定義について、誤解が無いように詳しく説明している。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

辻井千太郎は、かつて麻薬所持事件に絡んで刑務所に服役していた。出所時に母親はすでに病死し借金が残っており、どら焼き屋「どら春」のオーナー（大将）に返金するため店で働き始めた。三年後、大将が急死したため店を任されていたが、ある日、吉井徳江という高齢の女性が「バイトをしたい」と店を訪れた。

どら春には定休日というものがなかった。午前十一時を過ぎれば、毎日シャッターが開く。

千太郎が調理着に腕を通すのは、たいていその二時間ほど前だ。そこから仕込みを始めるのだから、ずいぶん遅い。本来それでは切り盛りできはずがなかった。だが、どら春にはどら春なりのやり方があった。

たとえば今朝もまた、千太郎は眠気覚ましの缶コーヒーを飲むと、配送されてきた段ボール箱を足で押して厨房ちゅうぼうに移動させた。粒あんの入ったポリ缶をそこから取り出し、昨日までの残りのあんと混ぜていくのだ。

違法というわけではないが、①まともな菓子屋ならまずやらない作業だった。あんは冷凍すれば保存が効く。短期間なら香りも品質もさほど変わらない。この店はあんのその性質に頼り切っていた。

どら春で使用しているあんは、先代の大将の頃から業務用のそれと決まっていた。懇意にしている業者が、中国製のものを五キロずつ届けてくれる。

つぶれはしないが、決して賑わうことのない店、それがどら春だった。ポリ缶ひとつ分のあんが一日ではけることなどまらなかった。必ず余りが出る。冷凍保存されたあんは、翌日か翌々日、あるいはさらにその翌日、こうして **A** される。

新旧のあんをこね合わせたあと、千太郎は生地の仕込みに入る。これを届けてくれる業者もないわけではなかったが、高くつくので自分でこしらえている。

生地を盛り、ボウルで練る。平鍋と呼ばれる鉄板に火を入れる。どらサジで生地を垂らし、焼き上げ、どら焼きの皮として保温ケースに並べていく。これだいたい開店時間になる。②溜め息をひとつ吐き、千太郎はシャッターを内側から開ける。そこで気合いを入れるわけでもなく、表情を変えるわけでもない。

午後、千太郎が厨房の椅子に腰かけ、コンビニの弁当をつまんでいる時だった。ガラス戸の向こうに白い帽子が現われた。

「婆さん……」

笑顔を向けてくるので、千太郎は仕方なく腰を上げた。

「えーと、吉井さんでしたっけ？」

白い帽子の下で、しわだらけの顔が「はい」と答えた。

「なにか？」

吉井徳江は手提げ鞆かばんのなかから、一枚の紙を取り出した。青いインク文字がそこにあった。癖のある字だった。一画ずつ跳ねるように躍っている。

「漢字ではこう書くのよ、私」

「はあ」

千太郎はちらりと見ただけで、「すみません、バイトは無理なんで」と紙を押し戻した。徳江は曲がった指で受け取ろうとしたが、そのままそつと手を引いた。

「見ての通り……指が少し不自由なのね。だからこの間の話よりも安くていいの。二百円でいいわ」

「なにがですか？」

「時給」

「いや、そういうことじゃなくて」

うちじや雇えません、と千太郎は繰り返した。すると前回と同じように、徳江はただじつと千太郎の顔を見た。千太郎は一步下がり、ケースのどら焼きに手を伸ばした。ひとつ包んで、帰ってもらおうという算段だった。

すると、見透かされたかのようにいきなり問われた。

「あんもお兄さんが作ってるの？」

「あ……それはまあ、企業秘密というやつで」

そう切り返したものの、③千太郎ののだ仏はおそらく縦に泳いだ。もしかと振り返る。

調理台にはコンビニ弁当とともに、粒あんのポリ缶がそのまま置かれていた。

しかもふたが開いてスプーンが刺さったままだった。千太郎は徳江から調理台を隠そうと体を横にずらした。

「私、この間このどら焼きをいただいて、皮はまあまあだと思ったのよ。でも、あんがちよつと」

「あんが？」

「そう。作った人の気持ちを感じられないあんだった」

「気持ちか、ですか？ おかしいな」

そんなものの最初からないとわかつていくせに、千太郎は①シンガイなことを言われたという顔をしてみせた。

「なんか、だらーつとして」

「あんは難しいんですよ。お婆……吉井さんはあんを作ったことあるんですか？」

「ずっと作ってきたの。もう五十年も」

紙袋に入れようとしていたどら焼きを、千太郎はあやうく落とすところだった。

「五十年？」

「そう、半世紀。あんは気持ちよ、お兄さん」

「はあ……気持ちねえ」

どら焼きの包みを徳江に差し出しながら、千太郎はふいの風に一瞬巻かれたような気分になった。

「でも……すいません。やっぱりうちじゃ雇えないんで」

「そう？」

「申し訳ないです」

徳江は左右の形が違う目でまたじつと千太郎を見たが、ややあつて、手提げ鞆から布製の財布を取り出した。

「お代はいいです」

「なんでよ」

ガラス戸のミニカウンターに徳江が硬貨を並べていく。その指がみな少しずつ曲がっていた。親指は手の甲の方に向かってねじれている。

「百四十円でいいのね」

不自由な指先で挟むので、百円玉一つと十円玉四枚が揃うまでに時間がかかった。

「あのね……お兄さん」

「はあ」

「これ、ちよつと食べてみて」

手提げ鞆から出てきたのは、円柱形のタッパーだった。ビニール袋越しだったが、なかに詰められた黒いものが千太郎の目に留まった。

「なんですか、これ？」

千太郎がタッパーを手にしている間に、徳江は店前を離れていた。

「これ、なんですか？ あん？」

すでに歩きだしていた徳江は体をひねつてうなずき、通りの角に消えた。

その夜、千太郎は駅前ちようしのそば屋で銚子ちようしを傾けた。

天婦羅を肴にぬる燗をやり、かけそばをすする。すすりながらも千太郎は、昼間のあれこれを振り返っていた。

徳江が去ったあと、千太郎はタッパーをそのままゴミ箱に放り入れたのだ。②呵責がなかったわけではないが、手を出そうという気にはならなかった。だが、ゴミ箱のふたを開けるたびにどうも目に入ってしまう。しばらくして、千太郎はそれを引き揚げた。わずかでも味わえば、③年寄りへの義理が立つような気がした。ところがその一口で、千太郎は「うん？」と眉を動かすことになった。

徳江のあんは、ポリ缶のものとまったく違っていた。香りも甘味も奥が深く、予想外の広がりがあった。

「五十年か……」

しばし立ち尽くすことになったその味わいを振り返りつつ、千太郎は猪口ちよこを唇につけた。

「俺が生まれる前から」

千太郎は壁に貼られた品書きに目をやった。そば屋の店主の手によるものだ。いつもそうなのだが、毛筆で書かれたその文字を見ると、千太郎は母親を思い出してしまう。

「あの婆さん……おふくろぐらいかな」

卓袱台に便箋を広げ、筆で器用に手紙を書いていた丸く小さな背中が千太郎の◎ノウリに浮かんだ。

⑤ いつもなら、千太郎はここで思いを断ち切る。とうに死んでしまった母親や、もう十年も会っていない父親のことは努めて考えないようにしている。

だが、この夜はそれができなかった。幼い頃、文章の手ほどきをしてくれた母親が目の前に何度も現われた。

「まったく……」

千太郎は酒臭い息を吐く。

先は読めないものだと思ってしまう。

物書きを志していたはずの自分が結果的に辿つてしまった道。＊1コンクリートの塀のなかから出てきた時、母親はもうこの世にいなかった。そしてここ何年かは、かつて一度も想像しえなかった日々を送っている。どら焼きの鉄板の前に立ち続けているのだ。

千太郎は猪口に酒を注いだ。苦くなった舌を洗うように辛口のそれをきゅつと呷った。

⑥ 記憶のなかの母親。

穏やかな言葉があった反面、不安定な胸のうちを隠さない人でもあった。父親と④ハデにぶつかったり、親戚の者と言い争いをして泣いたり喚いたりするところがあった。子供だった千太郎はその変化が恐かった。だから、甘いものが好きだった母親が饅頭やケーキを前に◎キゲン良くしている時は千太郎もまた平和を感じられた。その菓子がいつまでも卓袱台にあればいいなと願った。「おいしいねえ、千ちゃん」と笑みを浮かべていた母親が好きだった。

吉井徳江の極上の粒あん。もし母親が生きていてあれを味わったとしたら、どんな顔をしただろう。なんと言っただろう。

ああ、それなら……。

喜ぶ人がいるかもしれない、と千太郎は思った。

(ドリアン助川『あん』より)

(注) ＊1コンクリートの塀……ここでは、刑務所のこと。

問一 傍線部㉠㉡について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二 空欄Aに入る語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ㉢ リサイクル ㉣ リンク ㉤ ストック ㉥ シャッフル ㉦ フィードバック

問三 傍線部①「まともな菓子屋ならまずやらない作業」の説明として、**適当でないもの**を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 職人としての自尊心が問われる作業 イ お客様に対する信義に反した作業
ウ 世間からの評判ばかり気にする作業 エ 金銭面の利潤のみを追求する作業

問四 傍線部②「溜め息をひとつ吐き」とあるが、このときの千太郎の様子を答えなさい。

問五 傍線部③「千太郎のど仏はおそらく縦に泳いだ」について、このときの千太郎の様子をあらわす言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 息を殺す イ 面食らう ウ 気がとがめる エ 手に余る オ 途方に暮れる

問六 傍線部④「年寄りへの義理が立つ」について説明した次の文の空欄に、三十字以上三十五字以内の言葉を埋めて完成させなさい。

- ・吉井徳江さんが持参した粒あんを口にする一方で、ということ。

問七 当初は傍線部⑤のような考えだった千太郎が、傍線部⑥のように母親の記憶がよみがえってきたのはなぜだと考えられるか、具体的に答えなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これも今は昔、*₁山科の道づらに、四の宮河原といふ所にて、*₂袖くらべといふ商人集る所あり。その辺の*₃下種のありける、*₄地藏菩薩を一体造り奉りたりけるを、*₅開眼もせで*₆櫃にうち入れて、奥の部屋など思しき所に納め置きて、世の営みに紛れて、程経にければ、忘れにける程に、三、四年ばかり過ぎにけり。

ある夜、夢に、大路を過ぐる者の、声高に人呼ぶ声のしければ、「①何事ぞ」と聞けば、「地藏こそ」と、高くこの家の前にていふなれば、奥の方より、「②何事ぞ」と③いらふる声すなり。「③明日、*₇天帝釈の*₈地藏会し給ふには、参らせ給はぬか」といへば、この小家のうちより、「参らんと思へど、まだ目のあかねば、④え参るまじく」といへば、「構へて参り給へ」といへば、「目も見えねば、いかでか参らん」といふ声すなり。うち驚きて、何のかくは夢に見えつるにかと⑤思ひまゐらすに、あやしくて、夜明けて、奥の方をよくよく見れば、この地藏納めて置き奉りたりけるを思ひ出して、見出したりけり。これが見え給ふにこそと驚き思ひて、急ぎ開眼し奉りけりとなん。

（『宇治拾遺物語』より）

（注） *₁山科…地名。

*₂袖くらべ…品物の売買の時、他人にわからないように互いの袖の中で手を握り合つて価を定める取引の方法。またその行われる市場や商人をもいい、あるいは、それが地名化したもの。「そでくらめ」ともいう。

*₃下種…身分の低い者。

*₄地藏菩薩…仏の次の位の人。

*₅開眼…新たにできた仏像・仏画像を供養して、仏の霊を迎え入れる儀式。入眼。

*₆櫃…ふたを上を開けるように木の箱。

*₇天帝釈…天帝天（たいしやくてん）のこと。仏法を守る善神。

*₈地藏会…地藏菩薩を供養するための法会。

問一 波線部①「いらふる」・⑥「思ひまゐらす」の読みを現代かなづかいに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部①～③の話し手として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 商人 イ 下種 ウ 大路を過ぐる者 エ 地藏（菩薩） オ 天帝釈

問三 傍線部④について次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

Ⅰ 傍線部④「え参るまじく」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア お供え物を持参することができないということ。
イ 友達と一緒に外へ夜歩きに出掛けたいということ。
ウ 天帝天の地藏会に参上できそうもないということ。
エ 夜道を歩くことが怖くて出掛けられないということ。

Ⅱ 傍線部④「え参るまじく」とあるがそれはなぜか。その理由を四十字以内で答えなさい。

問四 本文の内容と合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 地藏菩薩が夢の中に現れたので、下種は奥から地藏を見つけて開眼供養を行った。
イ 下種は地藏菩薩を作ること生活のすべてを捧げて、気付けば三、四年が経っていた。
ウ 大路には夜の間も、評判になっている地藏菩薩を一目見ようと大勢の人々が集まった。
エ 地藏菩薩がひそひそと話をするのを怪しんで、商人たちは売上金を櫃の中に隠した。

入学試験問題
国語
解答用紙

受験番号

名前

[illegible][illegible][illegible]

受検番号		
名前		

上村 一 堅山											
問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七					
自分の行為の結果はコントロールできないということ。	工	④ けいしよう	危険機に見舞われた状況のなかで、人々が見知らぬ人のため	Ⅰ	他の者の潜在的	いうことと。					
		④ 過程		Ⅱ			気づかい、				
		⑤ 吸収			意外性に対して距離をと						
		④ 光景			よって						
		⑤ 隔離			て自分						
					が変化すると						
					意をもちて他者を						

二 演 田									
問一	① 心外	② エ	③ ウ	問四 仕事に対して積極的な気持ちが高まらず、やる気のない様子。	問五 イ	問六 老人のせつかくの行為に	問七 刻まれ、生前の母の母の記憶を懐かしい思い出として再認識できたから。	問八 とき母の好きだったあんを見事に作り上げる技術を持つ同年代の吉井さんが、母と重なり合う姿として脳裏に	問九 る
問二	④ 心外								
問三	⑤ 心外	⑥ かしやく	⑦ 脳裏	⑧ 派手	⑨ 機嫌				

梶原 三 士野		問一	③ いらうる	④ おもいまいらす
問四	問三	問二	① イ	② エ
ア	Ⅱ	Ⅰ	ウ	③ ウ
	に開眼	供養が行われ		
	閉じ込め			
	い			
	る			
	ない			
	た			
	め、			
	目			
	も			
	見え			
	す、			
	種			
	の中			